7th
KASUGAI City
Philharmonic
Orchestra
Regular
Concert
第7回
春日井市交響楽団
定期演奏会
'98 7/12(日) Sunday
開演　午後3時
春日井市民会館
主 催／春日井市交響楽団
共 催／春日井市
後 援／愛知県教育委員会、春日井市教育委員会、中日新聞本社

ごあいさつ

春日井市交響楽団
名誉会長

春日井市長
鵜飼一郎

本日、第７回を迎えます春日井市交響楽団の定期演奏会を、市民の皆様とともに鑑賞できますことは誠に喜ばしいことでございます。

春日井市交響楽団は、平成２年の誕生以来、毎年欠かさず定期演奏会を開催し、年々着実に実力をつけてまいりました。

また、「カポ」のこの定期演奏会は、毎年12月に開催される「市民第九演奏会」とともに、市民手作りの本格的なクラシック音楽を楽しめる演奏会としてすっかり定着いたしました。これもひとえに関係各位のご尽力と市民の皆様の温かいご支援の賜物と心から感謝申し上げます。

今回の演奏会には、イタリア・ナポリから国際的なピアニストであるアレキサンダー・インチェフ氏、指揮者にはカポとの数度の共演によりぴったりと息の合った竹本泰蔵氏をお迎えしています。

わがまち春日井にまた音楽文化の新たなページが加わります。この演奏会を通して音楽を愛する人々の輪がますます広がりますよう熱演を期待いたしましてごあいさつといたします。

春日井市交響楽団
会長

山田和夫

本日はようこそおいで下さいました。

春日井市交響楽団の定期演奏会の自慢は五つあります。この五つの自慢は、いずれもカポがいかに恵まれたオーケストラであるかを示すものばかりです。

一つには、いつもたくさんの市民のみなさまで満席になることです。春日井市民の音楽への関心度は極めて高いものがあります。

二つには、海外から一流のソリストをお招きして協奏曲を共演することです。

三つには、竹本泰蔵先生に指揮とご指導をお願いして、年々、カポの成長ぶりをみなさまにお聴きいただけることです。

四つには、ベートーヴェンの「英雄交響曲」のような最高のクラシック音楽を中心にプログラムを組んでいることです。

五つには、これがすべて無料で提供できることです。春日井市と賛助会員と楽団員と関係者のたゆまぬ努力がここにあります。

そして、私は、新しい六つ目の自慢が増えることを期待しています。それは、今日の定演が明日の春日井の話題となることです。

「カポの定演を聴きましたか？」
「ナポリから呼んだソリストが良かった」
「ルスランの序曲がとても速かった」
こういう声がみなさまの周りで聞こえることを願っています。

プログラム

歌劇「ルスランとリュドミーラ」序曲

Overture to Ruslan and Ludmilla

グリンカ（Mikhail Glinka　1804-1857）

ピアノ協奏曲第２番　ハ短調　作品18

Piano Concerto No.2 in C minor op.18

ラフマニノフ（Sergei Rakhmaninov　1873-1943）

《休　憩》

交響曲第３番　変ホ長調　作品55「英雄」

Symphony No.3 in E-flat major op.55 'Eroica'

ベートーヴェン（Ludwig van Beethoven　1770-1827）

指　揮　**竹本泰蔵**
Conductor ***Taizo Takemoto***

独奏ピアノ　**アレキサンダー・インチェフ**
Piano ***Alexandre Hintchev***

管弦楽　**春日井市交響楽団**
Orchestra ***Kasugai City Philharmonic Orchestra***

※本日の演奏会に関して、ピアノ（ヤマハCFⅢS）を、ヤマハ株式会社名古屋支店から、なお「ルスランとリュドミーラ序曲」の楽譜をトヨタミュージックライブラリーからそれぞれ無償貸与を受けました。心から御礼申し上げます。

プロフィール

指　揮　**竹本泰蔵**　たけもと たいぞう

1956年　神戸生まれ　　1974年　京都市立芸術大学音楽部作曲科に入学し、翌年指揮科に転科。その間、広瀬良平、阿部幸明、保科洋、及び山田一雄の諸師に師事。　1976年　名古屋フィルにヴィオラ奏者として入団。　1977年　カラヤン・コンクール・イン・ジャパンでベルリンフィルを指揮、第２位に入賞。　1978年　日本ユースシンフォニーの指揮者としてロンドンでデビュー。同年、カラヤンの招きによりベルリンフィルで２年間研修を行い、親しい指導をうける。以後、名古屋フィルアシスタントコンダクター就任を経て、現在コンサート、オペラ、バレエ、ミュージカルの公演指揮の他、編曲、ラジオ番組でパーソナリティーを務める等多方面に活躍中。

ピアノ　**アレキサンダー・インチェフ**　*Alexandre Hintchev*

ブルガリアのソフィアで音楽一家の家庭に生まれ、５歳から音楽を学ぶ。グリーグの「ピアノ協奏曲」でデビューしたインチェフは、ソフィア音楽アカデミーでガノフのもとで研鑽を積み、ディプロマを修得。ついで、ローマの聖チェチーリマ音楽院でヴィンツェンツォ・ヴィターリに師事し最優勝賞と奨学金を獲得。スヴァラトスラヴ・リヒテルとアレクシス・ワイセンベルクから好意的な評価と多くの助言をえて、彼らを継ぐ次世代の代表として一躍音楽界に踊り出た。国際ブゾーニ・コンクールで入賞し、ブダペストのピアノ・コンクールで優勝。以後、輝かしい演奏歴をもち、イタリア（ベルガモ大劇場、パレルモ大劇場、ナポリのサン・カルロ、ジェノアのコミュナーレ劇場など）はむろんのこと、スペイン、ブルガリア、ドイツ、オーストリア（ウィーン・コンチェルト・ザール）、ロシア（モスクワのチャイコフスキー劇場大ホール）、ウクライナ、リトアニア、フランス（パリのガヴォウ・ホール）、ハンガリー（ブダペストのフィルハーモニカ・ホール）、ベルギー、アメリカなど多くの都市でリサイタルを開き、いずれも大成功を納めている。多くの音楽プロデュースにも指導的な立場で関わっていて、ベルガモとブレッシアの「ピアニスト音楽祭」やフィレンツェの「フィレンツェの五月」やヴェニスの「RAI-TV：ラビア宮殿音楽祭」やトレントの「音楽の仲間たち」などの委員もしている。優れた指揮者との共演も多く、最近ではクラウディオ・アバドに招かれてウィーン現代音楽祭で演奏している。初来日。

管弦楽　**春日井市交響楽団**

春日井市が着実に発展し、市民の文化度が高まるにつれて音楽への関心も年々強まり、市民オーケストラ設立の気運がみなぎってきました。念願の「春日井市交響楽団」が官・民・学（大学）・専（専門家）・財の支援の下に創立されたのは平成２年11月。それ以来、恒例の「定期演奏会」と「春日井市民第九演奏会」を中心に、毎年充実した音楽活動を繰り広げ、「市民が演奏し、市民が聴く、春日井市民のオーケストラ」としてその役割を確実なものにしています。

音楽監督　**都築正道**　つづき まさみち

春日井市交響楽団と春日井市民第九演奏会の音楽監督。1940年名古屋市生まれ。名古屋大学文学部美学科卒業。関西学院大学院文学部博士課程修了。文学博士。朝日新聞音楽評を担当。オペラトークの司会や講演会・海外のコンクールの審査員としても活躍中。主著に『楽劇：音と言葉の美学』（音楽之友社）『あくびなしの音楽講座：トスカ』（同）など。地元では、中部大学キャンパス・コンサートの企画、春日井市音楽コンクールの審査員、フレッシュコンサートの委員、文化フォーラム・アドバイザリー・スタッフ会議委員などをつとめる。中部大学教授。

曲目解説

歌劇「ルスランとリュドミーラ」序曲　　グリンカ（1804-1857）作曲

ロシアの作曲家グリンカが書いた歌劇の序曲です。悪魔にさらわれた娘リュドミーラを若者ルスランが助け出す「救出物語」です。これほど爽快で元気の出る音楽はありません。最初から最後まですさまじいほどの速いテンポで演奏され、私たちの目の前を音楽が一気に駆け抜けます。愛するリュドミーラを抱きかかえて必死に馬を駆る英雄ルスランの姿が目に浮かびます。時には悪魔となって、時には駿馬となって、一生懸命に奏く楽団員の姿もなんと感動的ではありませんか。そうです、この序曲は、聴くだけではなく見る音楽でもあるのです。　［７分］

ピアノ協奏曲第２番　　ラフマニノフ（1873-1943）作曲

ラフマニノフは、「靴の中の指でペダルを踏んだ」といわれるほど繊細な感覚と優れた技巧をもったピアニストで、一度に12の白鍵に手が届き、左手は "C-Es-G-C-G" の音を楽々と取ることができるほどの世界一大きな手をしたピアニストでした。アメリカのロス・アンジェルスの病院で70歳の彼はその見事な自分の手を見つめながら、「私の愛らしい手よ、私の哀れな手よ、さようなら」といって癌のために亡くなりました。それでは、彼が20世紀の初めに書き、今世紀を通じて最高の人気をもつ《ピアノ協奏曲第２番》を聴きましょう。

ラフマニノフは、ペテルブルク音楽院の卒業作品歌劇《アレコ》（1892）で金賞をとりました。チャイコフスキーはこの作品を絶賛し、「彼こそ自分の後継者だ」といいました。ラフマニノフも、「チャイコフスキーに還れ」を目標に、色彩的でセンティメンタルでロマンティックな作品を書き続けました。作曲家として恵まれたスタートを切ったラフマニノフでしたが、24歳のときに不幸な事件が起きました。彼の自信作《交響曲第一番》がグラズノフの指揮で初演されましたが大失敗に終わりました。原因はグラズノフが酔って指揮したからだともいわれていますが、この騒ぎでラフマニノフは完全な神経衰弱におちいり、あらゆる音楽活動ができなくなりました。モスクワの神経科医ニコライ・ダール博士は、彼を救おうと、「お前は協奏曲が書ける。素晴らしい協奏曲が書ける。きっと書ける」と暗示をかけつづけました。この魔法の呪文が「ピアノ協奏曲第２番」を生みました。作曲者自身のピアノと従兄のジローティの指揮するモスクワ・フィルの演奏で初演されたのが、20世紀を飾る最初の年の1901年でした。今世紀も終わりに近づいた今も、この曲の人気はまったく衰えていません。だれの心にも伝わる感傷的な甘いメロディと短調と長調だけからなる古典的な和声進行ときらびやかな音色と節度あるおだやかなリズムでできているからです。長らく私たちが忘れていたプロフェッショナルな鍵盤の名人芸もここにあります。　［34分］

交響曲第３番「英雄」　　ベートーヴェン（1770-1827）作曲

「あなたの交響曲のなかでどれが一番お好きですか」と訊ねられたベートーヴェンは、すぐに「エロイカだよ」と答えました。「エロイカ」とは「英雄」のことで、1805年にウィーンで初演された「交響曲第３番」をいいます。ベートーヴェンも「英雄交響曲」が好きであったように、私たちもこの曲が大好きです。本日クラリネットを吹く春日井市交響楽団の花村浩克団長も、「なんかい練習してもそのたびにいい曲だなあと思う」と感激しきりです。私たちがこの交響曲のどこが好きかといえば、三つあります。「意外性」と「物語性」と「偉大さ」です。

まず、リズムが面白い。第１楽章は交響曲には珍しく３拍子です。でも急に２拍子になったり